

お勉強

喜多川雅人

「あら、またお勉強？」と、晶子のメゾソプラノが、食卓のある隣りの部屋から一朗の書斎に響いてきた。我が家の食堂は、鍵がないドアを境に、一朗の書斎に繋がっている。ドアは後期高齢者夫妻の安全のため開けっ放しにしてあるから、同じ部屋にいるようなもので、音は筒抜けである。

今月初め、年明けの三が日に、一朗は八十路の真ん中に達した。五歳年下の老妻は一月元旦生まれだからオメデタイ夫婦である。

「お勉強」とは、一朗が同好の士と楽しんでいるペンクラブの活動のことである。時事討論という固い勉強会もいくつかあるが、柔らかい掌編小説や川柳を楽しむ会が賑やかだ。

一朗の趣味は「卒サラ川柳」である。同好の士が隔月で、小田急線沿線にある行き付けのソバ屋の一室に集まり、会が盛り上がる頃には、ビール・日本酒・ワインなどで乾杯を重ねながら、持ち寄った川柳を勉強する会合がある。

皆さん八十路を辿っている。半年ほど前、「開く」の兼題で一朗が詠んだ二句は、はからずも高得点を得た。

「パソコンを開いては閉じ日が暮れる」

「ワープロがここを開けと誘い込む」

日がなパソコンと睨めっこしている爺さまたちの日常を描いたのが共感を得たのにちがいない。

二か月前の集まりでは、兼題「打つ」で詠んだ二句がうけた。同好の面々の顔を思い浮かべながら、彼らにうけそうな句を創るのが票を頂くコツだ。我が身を思い浮かべながら、思わず頬が緩んで、一票投じてしまうのだろう。

「メール打つ恋でないのに指震え」

…緊張しているわけではないのにそういう状態になるのだから情けない。

「八十路入り打ったメールをすぐ忘れ」

…これも日常茶飯事で、メールを貰った相手も同じ状態の仲間が多いから、其の都度お返事が来るから、それに気が付いて思わず笑ってしまう。

来月の兼題は「群れる」である。すでに句は浮かんでいる。一句目は、数十年前のサラリーマン時代を思い出して詠んだものだ。四十代の半ばだったろうか、海外の駐在先で、酒・麻雀。ゴルフに、仲間だけで群れるのを避けて、除

け者にされた苦い思い出を詠んでいる。

二句目はちょっと色っぽいが、北の大地や博多、あるいは海外駐在で、長かった单身赴任を偲び、懐かしんだ川柳だ。

「群れるのを避けて出世の道外れ」

「群れながら探った当たり今昔」

時は移って、杖が離せなくなった今は、詠む句もそれを描いて寂しい。

「卒サラ后命じる役は老妻に」

八十歳の老妻が上司である。年金の管理を含めて財布を握られているからやむをえない。ところが最近彼女の耳も怪しくなってきたようで、時々突拍子もないお返事を頂くようになった。会話がスムーズに行き交わないのである。

「命じても耳が遠くて空回り」

二人とも頑固なところがあって、補聴器は今のところ話題に上がっていないが、この先どうなることやら……。

……などと、川柳の句を持ち寄って、乾杯を重ねながら、ワイワイガヤガヤやるのが、格好のボケ防止になっているようだ、夫々の連れ合いから認められているようである。(完) 文字数・一一四〇語